

<一般研究>

新型コロナウイルス自粛期間中の身体活動および身体の変化についての調査

—運動教室参加の地域在住中高齢者について—

○井上哲朗、吉嶺真（国際武道大学）

本学では、地域の中高齢者を対象として運動教室を行っている。しかし、2020年新型コロナウイルスが世界的に大流行し、緊急事態宣言や外出自粛など様々な措置が取られ、運動教室も3月～7月中旬まで休止になった。本研究では、運動教室参加者を対象として、運動教室休会期間中の①身体活動の状況、②身体の変化、③運動実施の意義、④その他（自由記述）についてアンケート調査を行った。その結果、運動教室の休会や運動する場所の多くが閉鎖したことによって、身体活動量が減少していた。また、体力の低下を感じている者が多く見られた。したがって、身体活動の減少に伴う筋量の減少、体脂肪の増加が起きている可能性が示唆された。そして、地域において集団で行う運動教室を実施することは重要であることが示された。

ボランティアの中間支援組織に関する研究～スポーツボランティアに着目して～

○馬場宏輝（帝京平成大学）

筆者は、これまで学生と様々なボランティア活動に参加してきた。その中で学生を誘う・守る、依頼・主催団体との条件交渉やコーディネートという視点から、依頼団体と学生との中間支援の重要性を実感してきた。そこで、スポーツボランティアを希望する個人や集団とボランティアを必要とする団体の間に位置する中間支援の組織・機能・役割について検討した。先行研究では、「行政の設置するサポートセンター等は基本的に市民サービス施設のひとつであり中間支援組織ではない。中間支援組織に求められるものは、顧客満足を重視するサービス業者としてのマインドと、起業促進者、インキュベーターとしてのリーダーシップで官主導の中間支援組織には限界がある」などの指摘があった。各種調査から、中間支援組織が充実すれば、さらに多くの人に機会が提供できる可能性があることが読み取れた。またボランティアの中間支援組織の問題点として、単なるマッチング機能だけではなくマネジメント機能が求められると報告した。

陸上競技 110mH 競技者における踏切脚接地時間と競技パフォーマンスの関係

○櫻井健一(国際武道大学)、前田明(鹿屋体育大学)

本研究は、陸上競技 110m ハードル 競技者の踏切脚接地時間と競技パフォーマンスの関連性について検証し、パフォーマンス向上の要因を明らかにすることを目的とした。

対象は 110m ハードルを専門とする社会人と大学生競技者 19 名とした。実験試技は公認競技会と実戦に近い設定のタイムトライアルにて 1, 3, 5 台目のハードル横にハイスピードカメラを設置して分析した(CASIO 製 EX-F1 撮影速度 300fps)。分析項目は踏切脚接地から離地までの時間とした。

算出した値は 13 秒台, 14 秒前半, 中盤, 後半, 15 秒台, 16 秒台の記録に分類し平均時間を算出した。13 秒台から 14 秒中盤の競技者は 1 台目から 5 台目まで 0.11s 台の値であった。13 秒台だけが 5 台目で 0.10s 台まで短縮した。14 秒後半の競技者は 0.12s 台であり, 15 秒台の競技者は 0.12~0.13s 台であった。16 秒台の競技者は 0.13 台であり接地時間は長かった。競技パフォーマンスの高い競技者ほど短時間接地での踏切動作ができていく傾向があった。